

考える臨床検査 スクリーニング検査で異常値をみたら？

編集：松尾収二（天理医療大学医療学部 臨床検査学科 教授）
BEAM（Bunkodo Essential & Advanced Mook）編集委員会

B5判、193頁、定価(5,000円＋税)
出版社：文光堂 2015年発刊

本書はBEAMシリーズの17番目のテーマとして編集されたもので、代表的な検査項目について異常値を発見した場合の思考法、不適切な検査プロセスが引き起こす検査値への影響のまとめ、検査値の変動に関するミニレクチャーで構成され、最後にR-CPCのようにさまざまな症例をもとに病態を実践的に把握する訓練ができるようになっている。

まず、スクリーニング検査として汎用されている20の主な臨床検査項目について、異常値を認めた場合のメカニズムをどのように考えるかがまとめられている。そして、例えば「貧血」についての項であっても症例とともにスクリーニング項目の検査値が一覧で示され、テーマとなっている項目（貧血）だけ解説するのではなく、患者の病態を説明できるエビデンスを一連の検査の中からまず見出し、病態を確定するための検査へとすすむストーリーになっているため、無味乾燥に陥りがちな検査値の解説を臨場感とともに読み進むことができる。「こんなときは指導医に相談しよう」というセクションが各項目に設けられ、本書の記載だけで判断することが困難な病態について明記されていることも読者の安心感を呼ぶ。

臨床検査の現場で信頼性の高い精度管理のもとで検査を行っているにもかかわらず、サンプリング等の段階で検査値にバイアスをかけてしまっていることに気づいていない医療従事者も少なくないが、そのような方々に熟読いただきたいのが第II章である。非常にコンパクトにピットフォールがまとめられており、この章の各項セクションタ

イトルを暗唱するだけでも臨床検査の誤差低減に寄与するのではないかとと思われる。第III章ではこどもの検査値や薬剤が影響する検査値など、疾患以外の変動要因もまとめられており、これらの2つの章は検査値を読み解く上で知っておくべき基本知識ともいえる。

最後に症例から病態を判読する11の演習問題があり、検査関連の学会等で開かれるR-CPCに常に積極的に関与しておられる編者の解説により、臨床検査から症例を総合的に説明する訓練となっている。

本書はこのような構成で、終始、臨床データを用いた実践的な視点で学ぶことができるように工夫されており、臨床現場に出たばかりの医療従事者が臨場感をもって読める。臨床検査技師にとっても、自分たちが測定し報告している検査値がどのように利用され、どのようなエビデンスを与えているのかを本書をもとに理解することで、それぞれの検査項目に求められる「精度」や「報告までの時間」などの理解にもつながり、臨床検査の質の向上を生むのではないだろうか。贅沢をいうならば、検査前因子や薬剤による検査異常など、疾患とは無関係の異常値の原因を解明する演習問題があればさらに臨場感を感じたのかもしれないが、知識の取得ではなく思考プロセスの訓練を目的とした、「考える臨床検査」というタイトルどおりの良本である。

（渡邊幹夫：大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
生体情報科学講座 准教授
nabe@sahs.med.osaka-u.ac.jp）